

# 彼女と自転車

おおさき烈火

## 彼女と自転車

---

「ママいないよー」

会社の急な送迎会で  
午前様をして帰った朝。

遅寝＋休日という事もあり、  
中々起きられなかったのだが、  
娘のユウの  
いつもと少し違うトーンの声で  
目が覚めた。

築3年、  
分譲マンションの  
2LDK。

いつもは妻が起こしてくれるベッドから起きたものの、  
確かに、何処を探しても妻の姿が見当たらない。

いなくなった痕跡さえ  
特別には何処にも見当たらない。

例えば置手紙とか。

例えば妻の荷物がごっそりなくなっているとか。

なくなっているものはバッグや、洋服、玄関の靴・・・  
普段出掛ける時と同じ程度だ。

そして、リビングに戻ってきた時、  
充電器の上に置いてある俺のケータイが目に入った。

そうだ、ケータイ掛けてみるか。

充電のとっくに完了していたケータイを開き、  
メモリーの一番上にある電話番号に発信する。

「ただいま電話に出る事が出来ません・・・」

やっぱ、ダメか。

「あ、もしもし。俺。今どこにいる？心配してる。連絡くれ。」

そうだ、メール。

「今どこにいる？心配してる。連絡くれ。」

ったく。俺ももう少し何とか言えないものか。さっきと同じじゃないか。  
気が利かないな。本当に。普段文章を扱っている仕事をしているというのに、  
こういう時には何も出てきやしない。

ケータイでメールを打っていると、  
ユウが心配そうな顔で、  
俺の顔を見上げている。

「なあユウ、昨日のママ、いつもとなんか違う所なかったか？」

「う～ん、とねえ・・・とねえ・・・」

左手をパーにして右肘を支え、  
右手をグーにしてアゴにあて、  
上目遣いで、左右に揺れながら考え事をする。  
ユウのいつもの癖だ。

「あ！」

「ん？何かあったか？」

「そう言えば、ママ、時計何度も見てた！」

俺の帰りが急に遅くなったから・・・か。

アイツ、いつも俺の帰りが遅くなる時は、

そんな風に待っててくれてたのか。

悪い事をしてたな。

そのリビングの壁掛け時計を見る。

午前10時06分。

でも、アイツは、  
俺がこうやって時計を見ながら待ってても、  
帰っては来ないのかもな。

取り敢えず、警察に届ける前に、  
心当たりを探しに行くか。

クソ、しかし何だってこんな時、  
よりによって、車が修理中の時に出て行くんだ。

って、俺の所為、だよな。多分。  
アイツが出て行った理由。

それに、ユウも連れて行かなきゃいけないから、  
俺の自転車で行くわけにもいかないか。

歩きで行くか。

どこまで行けるか。

どこまでも・・・行けるか？

そうだ行く前に・・・

「ユウ、これからママを探しに出掛けるけど、朝ご飯、食べなくても平気か？」

「ユウ、あちゃまんま、食べたよ？」

“あちゃまんま”ユウの“朝ご飯”のいつもの呼び方だ。

「え？じゃあ、ママが朝ご飯食べさせてくれたのか？」

「ううん。テーブルの上に、作ってあった。」

確かに、キッチンの方を見ると、流しにはいつものユウの朝食用プレートが片付けられてある。我が娘ながら、こういう所はしっかりしているな。うん。

って。テーブルの上、俺の朝飯、作ってない。

やっぱり、いなくなったのは俺の所為、か。朝飯は、食べずに行くか。

・・・お、バナナ、バナナ。

ユウを一人で着替えさせている内に、テーブルの上にあったバナナを一本食べて、冷蔵庫からカップに牛乳を注ぎ、慌てて飲み干し、パジャマをスウェットに着替えて寝癖頭、無精髭のまま、着替えが終わったユウを連れて、玄関を出た。

エントランスを抜け、駐輪場の前を通ると、普段妻が乗っているママチャリが置いてある。

あれ？アイツ、自転車でどこか行った訳じゃないのか。しかも鍵、掛けっぱなしじゃないか。不用心だな。ま、良いか。お陰でユウを乗せて行ける。サドルの後ろ、荷台に子供用の椅子があるこの自転車なら。

自分の自転車より少し低いサドルの後ろ、子供用の席にユウを乗せて、いざ、出発。

「ちゅっぱつちんこう～」

「こ、コラ、ユウ、そういう事言うんじゃない！しゅっぱつしんこう～、だろ？」

“し”が“ち”になるのもユウのいつもの癖だ。

「ちゅ、しゅっぱつ、ち、ちち・・・」

「頑張れ！頑張れ！」

「ちちち・・・しんこう～」

「よく出来ました～。しゅっぱつしんこう～」

って。早く探しに行かないと。

取り敢えず、駅の方から探してみるか。

後ろに乗せた娘の存在を温かく感じつつ、  
少し重くなったペダルを漕いでいると、  
キーコキーコとあまり油を差していない自転車が、  
土曜日の朝、人通りのない路上で走りながら鳴いている。

ペダル、案外重いもんだな。

ユウもそれだけ大きくなったんだな。

生まれた時はあんなに小っちゃかったのにな。

アイツが頑張ってくれたお陰で生まれて来られて、  
こんなに大きく育てたんだよな・・・。

・・・おっと、でも今は、感傷に耽っている場合じゃないか。  
アイツを探さないと。

そう考えた時、  
普段アイツがどこへ行って  
何をしているのか、  
殆ど何も知らない自分に気付かされた。

そう言えば俺は、

仕事から帰って来て、  
アイツが話していても、  
ロクに聞いていなかったな。

ただ飯を食って、テレビを見ながら、  
今日の仕事の反省、次の日の仕事の事、  
今度出る車の発表会・・・  
そんな事ばかり考えていて、  
相槌は打っていたものの、  
それは条件反射みたいなもので、  
右から左へ聞き流していた。

馬耳東風、馬鹿な男だ。オレは。

自転車を漕ぎながら、後ろにいるユウに、  
振り返らず、背中越しに声を掛ける。

「ママ、どこ行ったと思う？」

「う～んとねえ、とねえ」

後ろにいるユウの考えている時にする  
いつものあの動きが目に浮かんで、  
思わず笑みがこぼれる。

「で、どこかわかった？」

「とねえ・・・カラオケ。」

「カラオケなんて行ってるのか。あの駅の向こう側のか？」

「うん。」

「そうだ。ママ、いつもどんな歌、歌ってるんだ？」

「とねえ、わかれまちょう、私たちから、きえまちょう、あなたから。」

ぶはっ。

思わずハンドル操作を誤り、  
右へ左へ蛇行運転、

と、

プッポー！

後ろからクラクション。  
危機一髪。

「ぷっポー！パパ、あぶないじゃにやいの！」

そして直ぐ後ろから娘の“くらくちゃん”。

「ご、ごめんごめん。」

心臓がバクバク言っているのは、  
急なクラクションの所為か、それとも・・・。

「で、でもユウ、よくそんな長いタイトル覚えてるな。」

「うん。だってママ、よく歌ってるから。」

ごはっ。

でも、こんな時に、呑気にカラオケに行っているとも  
思えないな。

と、考えていると、

後ろから電動車椅子の方が来ているのが見えたので、  
邪魔にならないようにと、  
また、大した当てもなく、  
駅の方へ向かってペダルを漕いだ。



「他には、どんな所に行ってるんだ？」

「とねえ、ホテル。パパが“ちゅっちょう”でお家にいない日に。」

ぐはっ。

ずしゃあああああ！！

焦ってハンドルを完全に取られた自転車は横滑りし、  
ドリフト走行の要領で後輪を滑らせ、  
アスファルトにタイヤのゴムの擦れた半円の軌跡を残しつつ  
車体バランスを崩しながらも、なんとか倒れずに急停止した。

電信柱に激突寸前。

急ブレーキの勢い余って、  
思わず俺は、自転車から降りてしまう。

ふ〜っ。

危うく大事な娘を乗せたまま  
クラッシュする所だった。  
幸い、後ろから車は来ていない。

「もう、パパったら！」

娘のその声を聞いた時、  
ふと妻の声が耳に甦った。

「もう、パパったら！」

一体、何処にいるんだ。アイツ。

電信柱の隣、  
灰色の塀越しに見える  
一軒家の庭先では、  
陶製の天使のオーナメントが

風に揺れている。

それにしても。

「ホ、ホホホホ、ホテルで。も、もしかして、ユウも行ったのか？」

「うん。行ったよ。」

「だ、だだだ、誰とだ！」

「とねえ。ママと、ユウと、ミヤビちゃんとミヤビちゃんのパママ」

「へ？」

ど、どういう事だ……。

「……で、ホテルで何したんだ？」

「あちゃまんま、たべた」

!!!

「ホ、ホテルって、帝国ホテルの事か！」

「うん。たちかそんな名前。」

クソ、アイツ、オレが出張でいない日に  
帝国ホテルでモーニングなんて食べてやがったのか。

でも、まあ、別の男と、別のホテルにいるよりは、良いか……。

う～ん。となるとその線も消えたか。

あとは……何処だろう。

そう考えながら、  
急ブレーキの勢い余って

降りてしまった自転車のサドルに  
再び跨ろうとしたその時、

サドルの下にある  
自転車のキー、  
そして、  
自転車のキーに付いている  
キーホルダーが目についた。

オレがプレゼントした  
キーホルダーだ。  
付き合い始めて三ヶ月の記念日に。

あれは、俺達が恋人同士として付き合い始めた頃、  
一駅離れた所に住んでいたアイツが  
オレの所に来るのに、  
歩きじゃ不便だし、  
電車は勿体無いし、  
車でアナタが迎えに来るまで待てないし、  
それに一緒に自転車乗りたいし。とかなんとか  
今からは考えられない位甘い事言って、  
買った（買わされた）自転車。

その時に一緒にプレゼントしたキーホルダー。  
あの頃の自転車とは違うけれど、  
キーホルダーまだ、付けててくれたんだ。  
朝乗る時は、何で気付かなかったんだろう。

そういえば自転車を買ったあの日も  
こんな梅雨空の日だったな・・・。

もしかして・・・記念日は昨日だったか。

そうだ、あの場所・・・。

俺達が、  
出会った場所。

サドルに跨り、ハンドルを返すと、  
最寄り駅の方から逸れて、  
付き合っていた頃住んでいた、  
別の沿線の駅の方へと、  
車輪の先は向いていた。

ユウを乗せて、  
初めて走る  
俺達が出会った街。

流れる景色。

流れる街並み。

あの頃の思い出、  
あの頃とは別の重みを  
乗せて走り抜けてく。

強い向かい風が通り抜けてく。

体へ風圧が掛かり  
ペダルをずっしり重くする。

それでも、俺は、  
後ろに乗ってる  
ユウの風除けになる。

ユウを守る。

一番大切な人との  
子供を。

久し振りの運動で、  
痛くなった、ふくらはぎ、ふともも、  
それでも構わずペダルを漕ぎ続ける。

そして、走り続け、  
思い出の道を辿り続けると、  
思い出の公園、  
思い出の場所に、  
“彼女”がいた。

その時、強い風が吹いた。  
彼女の髪をなびかせた。

公園近くのアパート、  
二階のベランダで  
季節外れ、  
少し早とちりな風鈴が、  
梅雨空の下で  
ちりんちりと、  
風に鳴いた。

その風鈴の音を聞いて、

そういえば付き合い始めて五ヶ月目の暑い夏、  
初めて彼女と行ったライブは、  
大黒摩季のライブだったと思い出した。

## 彼女と自転車

<http://p.booklog.jp/book/57489>

この作品はフィクションであり、実在する人物、団体等とは一切関係ありません

著者：おおさき烈火

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/oosakirekka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57489>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57489>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ